

以前熊本にいた時、音楽劇アグネスというのを見たことがあります。熊本県八代で殉教したキリシタン、竹田シモン五兵衛の妻、竹田アグネス加奈の話です。明日の朝には、処刑されるとわかっている主人公やその周りの人の行動や心の動きが描かれていて、感動して観ました。周りの人々の、大変な苦悩や怒りなどに比べて、主人公のアグネスは、前日処刑された夫と、また天国で会えることへの希望で貫かれた信仰が、ずっと表現されていて、当時のクリスチャンの信仰の強さ、そして、殉教することへの、一種の憧れみたいなものを、私は以前本で読んだことはありましたが、また演劇で目の当たりにしました。

今日の福音書の最後に、イエス様が「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」と言われていましたが、それは、もしかしたら、このアグネスの方が、イエス様に自分の弟子を送って、質問させたヨハネよりも立派だ、ということなのだろうか、とも思いました。

先週の福音書で、ユダヤ人たちに悔い改めを迫っていたヨハネは、ガリラヤとペレアの領主だったヘロデ・アンテパスが、自分の兄の妻を奪い取って、自分の妻にしたことを指摘して、それが原因で捕らえられ、死海の東側にあった、マケルスという所に建つ要塞の牢獄に入れられていました。そして、やがて首を切り落とされて死ぬことになるのですが、今は、いつ殺されるかわからない状態で、狭い牢獄につながれています。

このような牢獄にいても、外の弟子たちと話をすることはできたのでしょうか。イエス様がどんな行動をしておられるか、その報告を聞いていました。そしてヨハネは、自分の弟子たちをイエス様の所に送って、イエス様に質問させるのです。

「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」  
イエス様が、みんなの待っている救い主かどうか、問わせているのです。

この質問がなされた背景には、3つの可能性があるのではないかと、言われています。

ひとつは、この質問は、ヨハネが自分のために質問させたのではなく、弟子たちのために質問させた、という見方です。ヨハネが牢獄で、鉄格子越しに、弟子たちと語った時、イエス様が本当に「来るべき方」であるかどうか、弟子たちが質問したのに対して「イエスの本質について疑問があるなら、イエスのわざ、イエスの力を見てくるがいい。そうすれば、疑いが解消する。」

この、弟子たちの疑問を解消させるために、弟子たち自身で直接イエス様に質問させたとしたら、これに対するイエス様の答えによって、弟子たちは、イエス様を、来るべき救い主と確信できた、と言えるでしょう。

さて、2番目の可能性は、牢獄につながれているヨハネ自身が、実はイエス様の行動に、疑問を持っていて、明日をも知れぬ自分の命の中で、あせりを感じて質問したのではないかと、という見方です。

ヨハネは、神様の審判が下る時が迫っている、と告げていました。既に斧は木の根元に置かれていて、その方は、聖霊と火で洗礼を授ける、と預言していたのに、「イエス様は、いつ行動を起こされるのだろうか。いつ敵を撃破するのか。いつ悪人を滅ぼされるのか。」などとイライラしながら、見ていたのかもしれませんが。

しかし、3番目の可能性もあります。その見方は、この質問の中に、「喜びの兆し」「信仰と希望の兆し」を見る、というものです。

イエス様に洗礼を授けたヨハネは、牢獄の中で、イエス様について考えれば考えるほど、この人こそ「来るべき救い主」であるという気持ちになってきて、その希望を確認したくて、この質問をしたんだ、ということです。そこには、絶望とか焦りはなく、期待と喜びが満ちているのではないかと、思うのです。

イエス様は、「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。」と言いました。

これは「ヨハネに、私が何を言ったかではなく、私が何をしているかを報告しなさい。私が何を主張しているか、ではなく、実際に何が起きているかを告げなさい。」と言っているのです。

イエス様に、ファリサイ派の人たちや、熱心党の人たちは、ローマ帝国の奴隷のようにされている自分たちを解放して、独立した国を建ててくれるリーダーを期待しました。しかし、イエス様がなさったことは、正しい道を踏み外した弱い人に力を与え、罪によごれた人を清めることでした。良心のささやきや、神様の声を聞こうとしない人たちも、イエス様と出会って、初めて耳を傾けました。罪の中で力なく死んでいった人も、新しく清らかな命によみがえり、貧しい人は、神様の愛の豊かさを受け継ぐことができる、そんな、孤独な人間が、神様の愛に触れて、他の人への配慮ができる人間に変えられることが、イエス様の教えだった、ということです。

もし、ヨハネがそのような喜びの兆しを、イエス様の中に見出せていたなら、彼は幸いだったのだろうと思います。

さて、ヨハネの弟子たちが、イエス様の答えを聞いて帰ったあと、イエス様は群衆に向かって、ヨハネがいかに立派な人であるか、ヨハネを賞賛する言葉を語ったのですが、その最後に、「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」と言われたことについて、考えましょう。

私は、八代で殉教したアグネス竹田加奈が、洗礼者ヨハネより立派だ、と申しましたが、それは、ヨハネには、神様が人類を愛する証しとして、イエス様を十字架につけて、救いの道を開かれたことを知らなかったが、アグネスは知っていた。そして、私たちもそのことを知っている、ということです。

ヨハネは、神様の審きを宣べ伝え、悔い改めを迫りましたが、それは相手を威圧することはあっても、相手を喜ばせることはなかったのではないかと。しかし、イエス様は、相手を元気付けるために、徹底的に相手に仕える、その十字架の愛を示された。そのことへの驚きが、今回のヨハネが、弟子たちに質問させた理由ではないか。その愛を知って、感謝し、天の国を味わう者でありたいと思います。